

女性の人生と「子ども願望」の歴史的変容  
ーエリーザベト・ベック＝ゲルンスハイム個人化論の検討ー

人間福祉学科 生涯発達支援系 青柳琳子

本研究は、ドイツの家族社会学者ベック＝ゲルンスハイムによる出産、子育てに関する諸著作の文献研究である。特に彼女の女性運動の歴史の分析に着目し、検討を行った。一般的には、20世紀初頭の女性運動が「母性」を重視し、子育てをする女性を理想としたのに対し、1960年代以降の女性運動は、女性自身の人間的成長や自己決定を重視するとされている。これによって60年代以降子どもの重要性は低下しているとする論者も少なくない。例えば、歴史学者のアリエスはそのような議論を行うが、これに対しベック＝ゲルンスハイムはどの時代においても子どもをもつことはその重要性を保ち続けており、現在は女性の成長、自己実現の一つとして出産や子育てが行われるようになったと反論する。1980年代当時の西ドイツにおける女性の専業主婦願望の高まりも、こうした背景から理解できると彼女は批判的に指摘する。

こうした彼女の説明は、現代日本でも見られる、子育て世代の女性のキャリア形成の断念という現象を理解する上でも、重要な視点を与えてくれる。